

中国語文末型“是不是”に関するコーパスに基づく研究

楊, 明

<https://hdl.handle.net/2324/4496119>

出版情報 : Kyushu University, 2021, 博士 (学術), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏名	楊明			
論文名	中国語文末型“是不是”に関するコーパスに基づく研究			
論文調査委員	主査	九州大学	准教授	志水俊広
	副査	九州大学	教授	井上奈良彦
	副査	九州大学	教授	郭俊海
	副査	九州大学	准教授	劉羈
	副査	九州大学	名誉教授	松村瑞子

論文審査の結果の要旨

本論文はコーパスに基づいて、中国語文末型“是不是”の使用状況を記述・分析し、意味論的・語用論的観点からその意味と機能を解明したものである。

本論文は、全7章から構成され、その概要は以下の通りである。第1章は、序論であり、研究背景、研究目的、研究対象、研究資料、研究方法及び論文の構成について紹介した。第2章では、先行研究を概観し、いまだ解明されていない問題点を明らかにした上で、本研究の研究課題を示した。

第3章から第6章が本論である。第3章では、課題1「CCLコーパス（《現代汉语語料庫》）及び小説を研究資料として、文末型“是不是”の意味用法の分類を行い、各用法の相違点及び類似点を解明する」について取り組んだ。研究の結果、以下のことが明らかになった。1. 「命題質問」「推量確認」「認識喚起」「認識要請」という4種類がある。2. 話者間の情報依存関係により、「S（話し手）情報不確定・H（聞き手）情報依存」「S情報確定・H情報依存」「S情報確定・H情報不依存」という3つのタイプに対応できる。3. 各用法の情報要求度と情報提供度は、それぞれ『認識要請』<『認識喚起』<『推量確認』<『命題質問』』『命題質問』<『推量確認』<『認識喚起』<『認識要請』という昇順で表記できる。

第4章では、課題2「CCLコーパス及び小説を研究資料として、文末型“是不是”の各用法がどのような発話において出現するのかを調査分析する」について考察を行った。研究の結果、以下のことが明らかになった。1. 文末型“是不是”の各用法が出現する発話の過程において、話者の注目点が異なる。2. 命題の真偽を問う「命題質問」とは異なり、「推量確認」は命題の真を確認する。3. 一方、「認識喚起」や「認識要請」は命題の是認に注目する発話である。

第5章では、課題3「CCLコーパス及び小説を研究資料として、文末型“是不是”の最も多用される用法に注目し、その構造形式と意味機能について考察を行う」について分析を行った。研究の結果、以下のことが明らかになった。1. 話者は主張を提示したり、接続表現を使ったりすることで、積極的かつ婉曲的に相手に理由を述べる。2. 文末型“是不是”の前後に「氏名」や「親族名称」や「社会通称」や「役職名称」などを使用することは、ポライトネスに従った結果である。

第6章では、課題4「CJCSコーパス（『中日対訳コーパス』）を研究資料として、文末型“是不是”の日本語訳の傾向について検討し、日本の初級中国語教科書における文末型“是不是”の取り扱い現状及び問題点を述べ、文末型“是不是”の提示の仕方について教授法を提案する」について検討した。研究の結果、以下のことが明らかになった。1. 日本語訳は、主に「だろ系」「終助詞系」「じゃないか系」「疑問標識系」「その他」という5つのタイプがある。2. 日本人初級中国語学習者に、

実際の文脈や使用場面への提示、日本語のニュアンスとの対照をしながら、文末型“是不是”の意味用法を説明して学習させることによって、現代中国語の疑問文文型の全体像をより明確に示すことができ、言語知識を言語使用においてさらに活かすこともできる。

第7章は結論であり、各章の要約を行った上で総合的考察を行い、本研究の課題に対する結論を示し、研究意義及び今後の課題を提示した。

本論文は次の二点において研究の意義があると考えられる。第一に、文末型“是不是”に関して、従来の研究にはその命名及び帰属に偏って論述した傾向が見られるが、本研究は記述的な観点だけではなく意味論的・語用論的な観点も視野に入れて量的かつ質的に疑似疑問表現文末型“是不是”の形式と機能に関して分析を行った。本研究の考察によって、先行研究に見られる問題点に対する本研究なりの答えを明らかにした。そして、これまでの研究より詳細な考察を行ったことで、文末型“是不是”の意味機能、発話の回答状況、コミュニケーションにおけるポライトネスとの関わりを提案しており、本研究の結果は疑似疑問（付加疑問）研究、言語コミュニケーション研究、特に中国語学に貢献できる。第二に、現在中国語教育の現場では文末型“是不是”を代表とする疑似疑問表現を取り扱う教材が少ないため、本研究が与える示唆は中国語教育において学習者のコミュニケーション能力向上の一助になると期待される。よって、論文調査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するに値すると判断した。